

基本・実行計画の策定にあたって

1. 三好ジオパーク構想発足の背景と意義

山間部の傾斜地に点々と存在する集落、断崖絶壁の上に築かれた街道（古道）や急勾配の河川に架けられたかずら橋、吉野川と急峻な山々が醸し出す霧とそれが育むお茶、水はけのよい地で暮らし続けるために編み出された農法など、当地域の山間部にある傾斜地集落には、数世紀にわたって継承されてきた伝統文化が今も色濃く残っています。また、山間部で育てられた農作物は池田や辻などの平野に運ばれ、吉野川を活用した水運業により、街の繁栄につながりました。

これらの長きにわたって継承されてきた当地域の伝統文化は、自然と深く共存しながら培われたものです。さらに急峻な地形が他地域との交流の障壁となり、色濃い伝統文化が今まで残される要因となりました。

当地域の自然環境のベースとなったもの、それは地球の変動です。当地域の大部分を占める四国山地を作り出した材料はもともと3億年前の浅海性の礁、2～1億年前の海底堆積物および海底火山噴出物などです。それらはプレート運動によって寄せ集められ、地下深くにもたらされ、その後、隆起し現在の四国山地が形成されました。讃岐山脈を作っている地層は、約7500万年前の海底に堆積した砂や泥の地層です。これらの地層は、約300万年前から始まった中央構造線の活動によって隆起し、讃岐山脈を形成しました。この讃岐山脈の隆起によって、吉野川は当地域で大きく流路を東へ変えることになったのです。

四国山地や讃岐山脈が隆起する中で急斜面が作り出され、頻繁に地すべりが引き起こされました。地すべりが起きた場所は比較的緩やかな斜面になり、後々人々が住むことのできる場所となったのです。そうした土台があって築かれたもの、それがこの地域特有の傾斜地集落です。

このような特徴ある大地の上では多雨な環境、それがもたらす洪水、斜面災害などの厳しい自然条件がもたらされ、その中で当地域の人々は暮らし続けてきました。このことがこの地の唯一無二の伝統文化を形成したのです。そしてその伝統文化を生み出したベースとして、この地特有の地質や地形があったのです。

この自然と共存してきたことで培われた文化やそれらが放つ景観は、古くから当地域以外から訪れた人々を魅了してきました。近年では、東洋文化研究者のアレックス・カーなどの地域外から訪れた外国人たちや住民などによって地域資源の価値が見出され、現在ではインバウンドや体験型観光を中心に活用されています。とりわけ、大歩危小歩危、祖谷地区のインバウンド観光客の来訪者数は年々増加傾向にあり、2017年には米大手旅行雑誌Travel + Leisureの「2018年に訪れるべき50の旅行地」の一つとして祖谷地区が選定されるなど、目覚ましいものがあります。さらに、受け継がれてきた文化や特色ある地形、その上で育まれた生態系のいくつかは、将来への地域資源の継承のために文化財として保存されてきました。さらに、傾斜地畑で代々受け継がれてきた農法は世界農業遺産認定を受け、農法の継承に向けて活動しています。

しかしながら、この地で継承されてきた暮らしは現在、地域が抱える課題によって失われつつあります。

私たちの地域で最も大きな課題、それは人口の減少です。現在の人口は24,999人（2020年8月末時点）であり、20年前の70%未満の人口という急速な減少をたどっています。また、高校や大学進学、就職などによって当地域外に転出する若い世代が多くいます。

このような背景から、2020年時点で生産年齢（15～64歳）人口は老年（65歳以上）人口と同程度にまで減少しており、今後は老年人口の割合が増加すると予測されています。このことは私たちの地域のマンパワー不足および経済力不足などを引き起こし、環境の維持だけでなく、集落で築かれてきた文化の継承、自然災害を乗り越え続けるためのコミュニティの存続など、それらすべてを危うくさせるような弊害を地域へもたらしてしまうのです。

上記の大きな課題に対して、今、私たちみんなで何ができるでしょうか？その一つの答えとして、私たち自身がこの地域のことを理解し、未来へ繋いでいく取り組みがあります。

私たちの地域は恵まれており、持続可能な地域社会を築くために不可欠な特別な宝がたくさんあります。そしてそれらの宝の多くは、特徴ある三好の大地（ジオ）と密接に関わっているものです。長きにわたり保存、継承されてきた様々な地域資源、自然災害などを乗り越え暮らしてきた先人の知恵や工夫は、まさに持続可能な地域づくりそのものです。この価値を地域のみならず、地域を誇りに思い、将来につないでいくことが、この地域の資源や私たち自身をより魅力あるものにするため

の方法であり、これを促すことができる方法としてジオパーク活動があります。

以上のような背景から、私たち三好ジオパーク構想のビジョンとして「三好の大地に根ざした暮らしを誇りに思い、生きぬき、未来へつなぐ」を主軸に掲げ、持続可能な地域社会の構築を地域のみんなが一体となって目指します。

当地域の多様な歴史文化は、特徴ある三好の地質・地形がベースとなって育まれたものが多くあります。「三好の大地に根ざした暮らしを誇りに思う」とは、大地そのものや大地と関わる地域資源の価値を地域のみんなやこの地のファンの方々一人ひとりがジオパーク活動を通して知り、誇りに思うことです。そして、地すべり・崖崩れなどの斜面崩壊、吉野川の洪水、中央構造線や南海トラフなどの地震などの大地の変動に見舞われるであろうこの地の自然の脅威に対して、ジオパーク活動を通して「生きぬく」方法を共に考え、見出していきます。さらにこのような活動を推進・発展させ、当地域らしい特徴を「未来へつなぐ」取り組みを進めていき、持続可能な地域社会のあり方をみんなで考え、活動していきます。

2. これまでの取り組みとのつながり

① 教育（みんなが地域を誇りに思い続けるために）

当地域には、大歩危小歩危、祖谷地区をはじめとする他に類を見ない地質地形・生態系・歴史文化などの地域資源に恵まれています。この地域資源を活用し、様々な教育活動が行われてきました。

当地域のことを知るための教育活動として、学校教育では、各校での地域学習が行われてきました。地域学習が継続されてきた背景の一つとして、大学進学や就職に合わせて当地域外へ若い世代が流出してしまうことが挙げられます。地元を離れる私たちの子や孫達に郷土に誇りを持ってもらいたい、いつかは地元に戻ってきてもらいたいという思いから、第2期三好市教育振興計画に打ち出されているとおり、ふるさと学習が各校で継続されています。

また、学校教育以外の生涯教育については、郷土史研究や自然観察などの多種多様な文化活動が個別に行われてきました。

このように都市部ではすでに失われてしまった特徴ある地質地形や生態系などの天然資源や人的資源が当地域にはあり、様々な活動を通して活用されてきました。しかしながら、私たちの地域が抱える“人口減少”によって個別におこなってきた活動が衰退し、これらの大切な地域資源が失われてしまう状況に差し迫っています。

今後、加速する人口減少問題を当地域なりの手法で切り込んでいくためには、当地域の持つ地域資源の付加価値を私たちが見出し、この地域全体の魅力を世界中の多くの人を知り、訪れてもらえるような取り組みを推進することが大事です。そのためには、何かをベースや接点とし、地域資源同士をつなげることが必要です。それをつなげるベースや接点として、大地（ジオ）があります。そして、それを促す活動として、特徴ある地質・地形を包括した地域資源や地域社会のありようについて学ぶ「ジオパーク教育」があります。ジオパーク教育により、地域資源の価値を私たち一人ひとりが知り、誇りに思うことが当地域で暮らし続ける原動力となり、持続可能な地域社会の構築を促すことができます。

② 景観保全、文化の保全（文化財、世界農業遺産）

◆ 文化財としての地域資源の保全・活用

当地域には特徴ある地質地形、生態系、歴史文化が多様にあります。当地域では、これらの地域資源のうちのいくつかを指定文化財として保存・活用してきました。このうち、「祖谷の蔓橋」（祖谷のかずら橋）や「東祖谷山村落合」（落合集落）や「大歩危小歩危」などが、当地域のツーリズムの主軸としても活用されております。

また、剣山系および祖谷溪などをエリアとする剣山国定公園や、讃岐山脈中腹にある箬蔵県立自然公園などの自然公園もあり、特有の地形地質や生態系が保全されています。

ジオパーク活動を通して、これらの文化財や自然公園、そして他の地域資源のつながりを通じた当地域全体の地域資源の保存や活用について私たち一人ひとりが考え、将来へ残す（受け継ぐ）取り組みを推進していきます。

◆ 世界農業遺産

私たちがこの山間部の傾斜地で暮らしきた中で、現在まで継承されてきたものの一つに独特の農法「傾斜地農法」があります。当たり前のように継承してきた農法ですが、他の地域にはない特徴あるものです。その価値が認められ、にし阿波地域（美馬市・三好市・つるぎ町・東みよし町）の特徴的な傾斜地畑での農法が2018年3月に「にし阿波傾斜地農耕システム」として世界農業遺産に認定されています。この傾斜地農法は急峻な山地の中に点在する緩傾斜地で生まれた農法で、傾斜面に合わせた農具や斜面の向きに合わせた農作物の栽培など、特有の農法が特徴です。傾斜地緩斜面は過去に発生した地すべりなどの斜面崩壊によって作られたものであり、当地域をはじめとするにし阿波の特徴ある地質・地形があったことでこの農法が生まれ、継承されてきました。

この特徴をジオパーク活動で活かし、世界農業遺産事業を組み合わせた活動を展開することにより、傾斜地農法に関わる保全や文化の継承に取り組むことが可能です。

世界農業遺産（GIAHS）

世界農業遺産とは、伝統的な農林水産業を営む地域（農林水産業システム）の中で、世界的に重要と認められる地域を、国際連合食糧農業機関（FAO）が認定する制度です。

ユネスコにより認定される世界遺産は、基本的に現状を変えない「静的保全」に対して、世界農業遺産では変化しながら保全していく「動的保全」を行なっています。

その対象は、伝統的な農林水産業と、それを取り巻く人・文化・食・景観などの全てを含む農林水産業システムです。時代や環境の変化に適應させながら、「生きた遺産」として保全し、未来へつなげる活動を行なっています。

2020年3月末時点では、世界22カ国59地域、日本では11地域が認定されています。

③ 防災

当地域やその周辺の急峻な山間部には傾斜地集落が点在しており、昔から現在に至るまで、地すべりなどの斜面災害を乗り越え、暮らし続けてきました。そのため、私たちの暮らしの感覚の中に”山は崩れるもの”という意識が根付いています。同様に、吉野川による洪水も同じです。吉野川の上流域の年間降水量が3000mmと多いため、吉野川の中・下流域は古代から洪水被害に悩まされました。

これら2つの自然災害は、短期間（数年あるいは数十年レベル）で発生し続けてきたために、私たちの中で半日常的な出来事として捉えられています。

この地で起こる数百年あるいは数千年レベルの長期的な自然災害については地震が挙げられ、2つ地震によるリスクが考えられています。一つは三好市北域に東西方向に貫いている中央構造線活断層系で、直下型地震が懸念されています。もう一つは約100年に一度引き起こされる南海トラフ地震による揺れや斜面災害などです。

短期的・長期的に起こる、この地特有の自然災害に対して私たち一人ひとりが“生きぬく”ためには、三好の大地の特徴を理解することは必要不可欠です。私たちがジオパーク活動を通じて、大地の活動が引き起こす自然の脅威と恵みの関係性や自然現象のメカニズムを知り、防災意識を高めていきます。

④ 観光

私たちが暮らしている三好ジオパーク構想エリアの風景。私たちにとっては見慣れた風景ですが、古くから他の地域から訪れた人々を魅了する風景であり、それがこの地域の観光のベースとなっています。

当地域やその周辺には、自然と共存してきたことで培われた文化やそれらが醸し出す景観が遺されています。四国内でも有数の観光地として知られる「大歩危小歩危」は、四国山地の中でも非常に急峻な地形を有する場所であり、そこへ豊富な水を湛える吉野川が流れることによって成立する景勝地です。また、「祖谷のかずら橋」「落合集落」などの祖谷地区に点在する観光地も、傾斜地集落があることで築かれた文化の一部です。それらの傾斜地集落は、地すべり地形の上に築かれたものです。

近年では、移住者や研究者らをはじめ、観光地域づくり団体などによって当地域の地域資源の価値が見出され、大歩危小歩危や祖谷地区を中心にインバウンドや体験型観光の地として注目されています。

山間地が外国人にとっての観光対象となっているのは、国内でも稀なケースです。来訪者のうち、2割近くが外国人旅行者であり（平成31年度かずら橋渡橋データ）、うち、アジア圏観光客が9割近く滞在し、宿泊やそばうち体験などの生活文化体験などが主に行われています。

自然を活用したアクティビティーも盛んで、大歩危小歩危周辺の吉野川では急峻な地形が作り出す激流を活用したラフティング、池田ダム湖

では静水面を活用したウェイクボード、剣山周辺の高峰ではトレッキングなどがあります。

このように、大地が密接に関わった自然景観やそこに暮らしている人々の営みに触れることのできる体験が、国内外の観光客の目に魅力あるものとして映っています。

三好ジオパーク構想の様々な文化的要素の背景には、大地が深く関係しています。しかしながら、現在の観光は文化的要素の背景のみクローズアップされており、大地との関係性や大地の要素までひっくり返した観光には至っていません。

今まで築き上げてきた当地域の観光とジオパーク活動を組み合わせることで、大地という観点を組み入れた新しい観光（ジオ観光）を作り出し、既存の観光にさらに深みを持たせることができます。また、今まで観光資源が乏しいと思われていた地域においても、ジオ観光という観点から資源の発掘を私たちが一丸となって行うことで、新たな観光資源を生み出すことができます。そうすることで、今までの観光スポットだけでなく、注目されていなかった地域資源にも付加価値をつけることができ、地域内を周遊することが可能となります。

3. 三好ジオパーク構想

基本計画・第1期実行計画策定の位置付け

基本計画・第1期実行計画は私たちがこれから推し進める三好ジオパーク構想の目指す指針を表すものです。当地域内のジオ（大地）やジオとつながりのある地域資源の特徴を私たち地域住民、民間団体、研究機関、行政が正しく理解し、保全し、また教育や観光や防災など多岐にわたる事業において、協働で活用し続けることを目指します。そして、この地を私たち一人ひとりが誇りに思い、次世代につなぎ、将来にわたって当地域で持続可能な暮らしをするための指針として、本計画を策定します。

4. 基本計画・第1期実行計画の計画期間

三好ジオパーク構想の基本計画は今後10年を見据えた中長期的に目指すべき姿を示し、また、第1期実行計画は2022年度の日本ジオパーク認定を目指し短期的な活動方針を示します。さらに第2期実行計画では、ユネスコ世界ジオパーク及び日本ジオパークの活動状況や地域の状況を踏まえて、より発展的な形に改訂する予定です。

